

奥尻町

社会科教育専攻 1 年
7327 橘 かおり

1. 地名の由来

町名は、アイヌ語の「向こうの島」を意味する「イク・シリ」が由来である。古いアイヌ語の「イクシュン・シリ」その後「イクシリ」と訛ったもので、イクは「向こう」、シリは「島」の意味である。

2. 歴史

歴史は古く、約 7 千年前の縄文時代早期に人が移り住み、多くの貴重な遺跡や遺物が出土している。とくに「勾玉」は国内最大級のものが出土し、国宝級にも匹敵する。1767 年（明和 4 年）に田口九兵衛が漁業を営むために移住して以来、永住する人が増えたといわれる。

明治 2 年に島全体が「奥尻郡」となり、「釣懸」「赤石」「薬師」「青苗」の 4 ヲ村を設置した。明治 12 年には戸長役場を置き、明治 39 年に「奥尻村」となる。昭和 41 年 1 月 1 日に「奥尻町」制を施行し、町章を制定した。

奥尻港湾、奥尻空港の整備、江差・せたな間の定期フェリー就航など、交通面を中心に島の生活環境の整備も進んでいたが、平成 5 年の「北海道南西沖地震」で壊滅的な被害を受けた。当時、島の再建は絶望的といわれたが、全国からの物心両面からの温かい支援や協力によって町民が一丸となって復興に立ち上がり、策定した「奥尻町災害復興計画」に沿った防災対策をはじめとする復興をわずか 5 年間で果たすことができ、平成 10 年に「完全復興宣言」をするに至った。

その後も「災害に強い町」を基調にまちづくりを進め、歴史に裏打ちされた先人の苦労や偉業を尊びながら、豊富な水産資源や貴重な観光資源を活かした奥尻町の更なる発展と、ここに住む町民の幸福を願いながら現在に至っている。

3. 地図・地理・気候

奥尻島は東経 139°31'04"北緯 42°10'11"の北海道の南西端に位置し、江差町の西 61km・

図 1 昭和 30 年代頃の奥尻市街地の様子



出典：奥尻町役場ホームページ

瀬棚町の南西 42km の日本海に浮かぶ離島である。

東西 11km、南北 27km の南北に長い台形状の島で、道内では利尻島に次ぐ面積を誇る。

面積は 142.97 平方キロメートルである。島の周囲は実に 84km にも及び、複雑な海岸線は海の幸の宝庫となっている。

島の全域は花崗岩の段丘で形成され、その段丘を横切って河川が流れるため滝が多い地形となっている。また、かつて硫黄が採鉱されていただけあって、温泉が湧く島となっている。

図2 奥尻町の地図



出典：奥尻町役場ホームページ

図3 奥尻町の位置



出典：奥尻町役場ホームページ

表1 気象

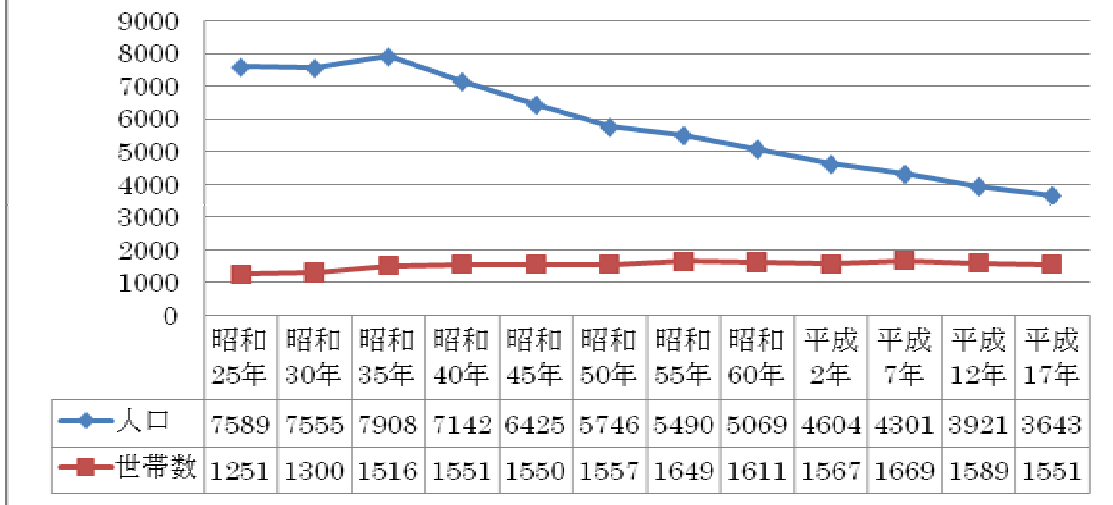
気温			年間日照時間
月平均最高気温	月平均最低気温	年間平均気温	
(8月) 21.9℃	(2月) -3.1℃	9.5℃	1534.3時間
降水		降雪	
年間降水日数	年間降水量	年間積雪日数	最大降雪深
81.0日	623.0mm	119.0日	69.0cm

出典：奥尻町役場ホームページ

4. 人口・世帯数推移

現在の奥尻町の総人口は、昭和 35 年の 7,908 人をピークに減少し、平成 19 年 6 月末現在では 3,541 人である。男女別にみると男性は 1,790 人、女性は 1,751 人である。同様に、世帯数も減少傾向にある。年々過疎化が進行しており、奥尻町も過疎化について考えていく必要がある。また、奥尻町の将来人口は平成 42 年に、1,832 人になると推計されている。

グラフ 1 人口及び世帯数の推移

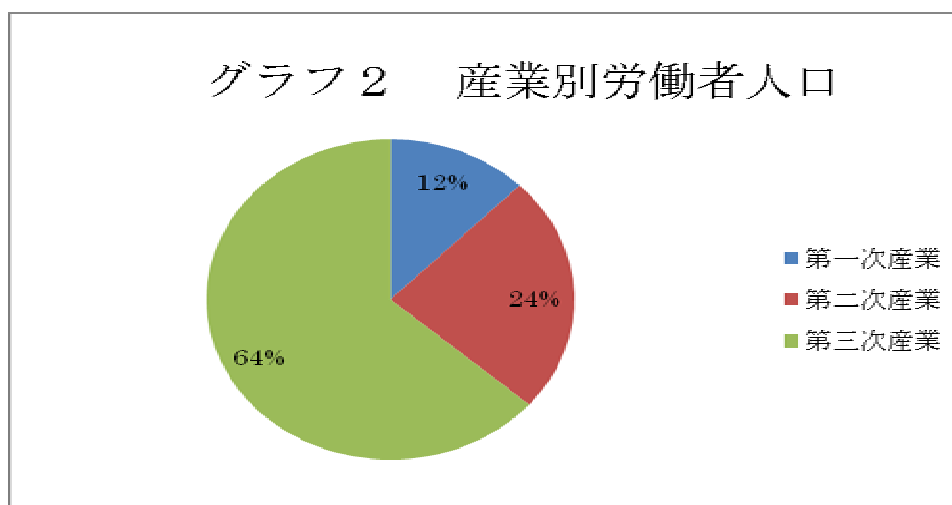


データ：国勢調査

5. 産業別労働者人口

第一次産業は 256 人、第二次産業は 493 人、第三次産業は 1309 人の総計 2058 人である。下の産業労働者人口のグラフをみると、第三次産業に従事する労働者人口が全体の 5 分の 3 以上を占めている。ここから、奥尻町では観光業に力を注いでいることがわかる。また、奥尻町は日本海に面しており、昔から漁業がさかんに行われてきた。これもまたグラフから読み取ることができる。奥尻町の産業の柱は漁業と観光業にあるといえる。

グラフ 2 産業別労働者人口



データ：奥尻町役場ホームページ

6. 産業

奥尻町は古くから水産業が盛んで、豊富で新鮮な魚介類に恵まれていることから、昔から「夢の島」「宝の島」とも言われてきた。明治末期まではニシン漁が主体で、近年はイカ、ホッケなどの近海漁業や、ウニ、アワビを中心とした磯根漁業が主体である。その豊富な海の幸を求めて観光客が増え、現在では水産業と観光産業の両立を目指している。

6.1 水産業

奥尻町の産業の中心ともいえる漁業であるが、近年では漁業者の高齢化や経営体の小型化などが進行している。南西沖地震による震災の打撃からは回復しつつあるが、イカ、ホッケ等の漁獲量が減少している。漁業生産高は、平成元年の約 19 億 5 千 900 万円から平成 10 年には 10 億 5 千 800 万円程度へ大きく減少し、全体として減少の傾向にある。また、うにやあわびなどを中心とした栽培漁業への転換が進められている。町では、平成 11 年に「あわび種苗育成センター」建設し、温泉水を利用したあわび稚貝の生長の促進を行っている。

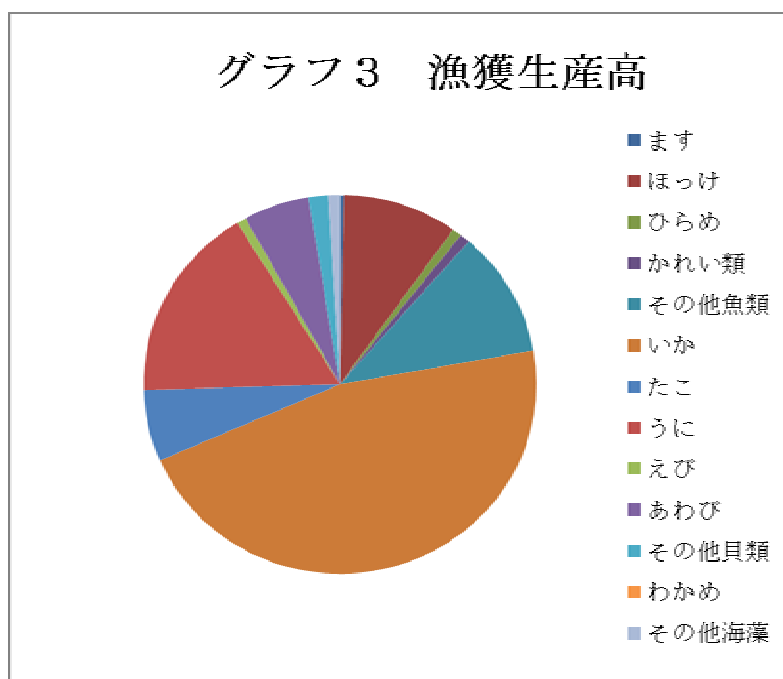


表2 漁獲生産高

ます	2616
ほっけ	81640
ひらめ	6762
かれい類	7149
その他魚類	93143
いか	399377
たこ	52995
うに	144534
えび	6714
あわび	46494
その他貝類	14195
わかめ	1
その他海藻	8012

(単位:千円)

データ：檜山支庁ホームページ（北海道水産林務部「平成 17 年北海道水産現勢」）

6.2 観光業

観光業は水産業と並んで島を支える基幹産業として大きく期待が寄せられている。観光客は夏季を中心に年間 5 万人程度で推移、南西沖地震以前は約 5 万 6 千人程度で年々増加傾向にあったが、震災後急激に落ち込み、平成 10 年で回復、現在は横ばい状況が続く。観

光施設も従来のものに加え、「奥尻島津波館」「徳洋記念緑地公園」「佐藤義則野球展示室」「球島山展望台」などを整備した。「奥尻三大祭」の充実や平成 11 年度から観光バスの「観光復興キャンペーン事業」により、観光客の誘致に努めている。7～8 月の 2 ヶ月間は定期観光バスが運行している。

表3 観光客入込状況 (単位:千人)

入込総数	上・下半期別		道内外別		宿泊・日帰別	
	上期 (4月～9月)	下期 (10月～3月)	道内客	道外客	宿泊客	日帰客
52.6	43.2	9.4	40.7	11.9	51.7	0.9

(平成17年度)

データ：檜山支庁ホームページ

6.3 観光名所

訪れる人をやさしく迎え入れる奥尻島のエントランス、フェリーターミナルがあるエリアには、公共施設や商店が集中し、明るくオープンな雰囲気満ちている。日本海の荒波が作り出した奇岩「なべつる岩」、巨大モニュメントがある「うにまる公園」など、奥尻観光の代表的な名所も点在している。また、夜間には、奥尻島の観光のシンボル「なべつる岩」はライトアップされ、「うにまるモニュメント」は自動発光するなど、幻想的な世界も楽しむことができる。

図4：なべつる岩



奥尻島のシンボリックな岩。鍋の取っ手（つる）に似ているのが名前の由来。高さ 19.5 メートル。夜はライトアップされ暗い海に浮かび上がる。

図5 うにまるモニュメント



奥尻を代表する海の幸「キタムラサキウニ」をかたどっている。120 本のトゲが夜にはライトアップ。

出典：奥尻町役場ホームページ

島のイベントとして毎年奥尻三大祭が行われている。地元参加型が主であるため、誰でも自由に参加することができる。毎年多くの観光客が訪れ、にぎわっている。

1. 賽の河原祭

図6 賽の河原祭



出典：奥尻町観光協会ホームページ

道南五霊場の一つである島の北端・稲穂岬の「賽の河原」で、奥尻三大祭のトップをきって「賽の河原祭」が開催される。海難犠牲者や幼少死亡者、身内の故人の冥福を祈る慰霊の地で法要や供養のため行事が行われる。また、子供相撲やソフトボール大会その他歌謡ショーなども開催されている。

2. 室津祭

図7 室津祭



出典：奥尻町観光協会ホームページ

島の南端・青苗岬沖合にある「室津島」にちなみ、航海の安全と大漁を祈願して「室津祭」が青苗漁港内で開催される。この祭は、室津島までの漁船パレードが圧巻で「海」にちなんだ多彩な協賛行事が行われている。また、新鮮な魚介類がその場で焼いて食べられる「海の幸味三昧」が地元の人にはもちろん、観光客にも絶大な人気がある。

3. なべつる祭

図8 なべつる祭



出典：奥尻町観光協会ホームページ

奥尻三大祭のフィナーレをかざる「なべつる祭」が奥尻港湾内で開催される。この祭は、奥尻島の観光のシンボル「なべつる岩」にちなみ観光祭と産業祭を兼ねた島内最大のイベントで、歌謡ショーなどの多彩なアトラクションや協賛行事が開催され、観光客や町民で大いに賑わいを見せている。

7. 南西沖地震

図5 奥尻地区の山崩れ



出典：奥尻町役場ホームページ

図6 青苗地区の火災



出典：奥尻町役場ホームページ

奥尻島は、過去に様々な自然災害に幾度となく襲撃され、その都度住民の懸命な努力で復興を成し遂げ、今日の奥尻町の発展を築いてきた。特に、平成 5 年 7 月 12 日午後 10 時 17 分に突然奥尻島を襲った「北海道南西沖地震災害」は、日本海観測史上最大級のマグニチュード 7.8 を記録し、過去に例のない地震、驚異的な速さと高さの津波、その後の火災と 3 重の大惨事に

遭遇して壊滅的な被害を受け、当時は「奥尻島の復興は無理」とも言われた。

青苗地区や稲穂地区では「漁業集落環境整備事業」が水産庁の補助事業として認められ、また、初松前地区では「まちづくり集落整備事業」が町の単独事業として進められた。いずれの事業も、津波高より求められた防潮堤の背後に盛土を行なって一定の高さに整備し、道々奥尻島

線の改良、集落道路、生活排水処理施設、避難場所、防災安全施設など、防災面、安全面に配慮した市街地計画にもとづき整備を行なった。また青苗岬地区では、「防災集団移転事業」が国土庁の補助事業として認められ、高台地区に宅地造成を行なった。奥尻町では、全国各地から寄せられた多くの義援金の中から、当初 90 億円を原資として被災者の方々の自立復興を強力に援助しようと「災害復興基金」を設立させた。

◆◆参考◆◆

<http://www.town.okushiri.lg.jp/> 奥尻町役場ホームページ

<http://www.hiyama.pref.hokkaido.lg.jp/> 檜山支庁ホームページ

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/> 北海道庁ホームページ

<http://www.unimaru.com/event.html> 奥尻町観光協会ホームページ